

さ、とよう、パートが

一人ひとりが否応なく 考へるべきこととしてフクシマはある

伊藤氏貴

いとう うじたか／文芸評論家、明治大学准教授

当時の菅直人首相の対応が適當だったかどうかといふ議論には、彼が理学部応用物理工学科卒業だということも関係していた。そこに過信が宿っていたのではないか。しかしもはやそんなことはどうでもよい。文系の首相でも、おそらく同じ程度のことはできた。同じ程度のことしかできなかつた。当時のそれより優れたどのような対応がありえたか、その具体的な手段は今もって明確にあがつてない。つまりあれが「最善」の対応だったということだ。

しかし、いまだに放射線がまき散らされつづけるこの現状をして「最善」とは、不条理な思いを飲み込みつつそう言わねばならない状況をつくりだした、

いやその状況にすでにわれわれがどつぶりと漬かっているといふことを思い出させたのがフクシマという経験だつた。だから、ナンシーが「フクシマの後で」と言うときに、それは世界の急激な変革を指すのではなく、むしろフクシマという事件が明らかにした、その「前」から繰々とつづく現代文明の状況にわれわれの注意を向けようとするものである。

おそらく、当時首相の座にあつたのが原子力の専門家だったとしても、だからといって事故の被害が著しく減少させていたと思う者はないだろう。つまり、われわれはもはや、自ら制禦できないほど巨大な力を手にしてゐるのであり、その力の前では、

手段も、人間も動物も、すべてがこの力の前では交換可能な「等価」なものとなる。

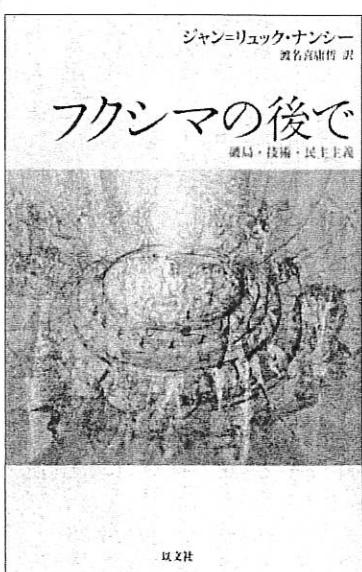
しかし、「等価性」とは言い換れば「無価値」というのとほとんど同じだろう。ただ、われわれがフクシマのような事態のためだ。われわれはその力の交錯の中でただ翻弄されているにすぎないのだが、フクシマ「前」はともするとそのことを忘れていたのではなかつたか。ナンシーは、この技術・政治・経済の不可分にして巨大な力の「等価性」でなく眞の「平等」を

を、この文明をどう捉えるのかという大局から考えなければならないということなのだ。本書の副題に「民主主義」が含まれているのもその理由による。政治家や科学者に任せきりにするわけにはいかない。本書の一部は、日本から要請された講演に基づくが、当然こうした要請が哲学者である自分のところにくるだろうと予想していたとナンシーは言う。一人ひとりが否応なく考へるべきこととして、否応なく考へるべきこととして、

勝ち取ること。「平等」とは、「等価」のように個別性を奪われておらず、それぞれが特異な存在として崇敬をもつて共存することだ、とナンシーは言う。

だから、問題は、原発をどうするかにとどまらず、この社会者が一人でもいるのだろうか。

書評委員
伊藤氏貴 倉本さおり
佐々木敦 鈴木杏子



『フクシマの後で 破局・技術・民主主義』
ジャン=リュック・ナンシー=著 渡名喜庸哲=訳 以文社
2520円 ISBN978-4-7531-0306-5